

## 「今の時」の見分け方

牧師 山本 護

礼拝堂に入ると昨夜の空気が溜まっていて冷えびえしています。ああ、もうこんな季節か。礼拝の時、ほんの少しでも火があるといいかなと思い、試運転のつもりで細い薪を2~3本燃やしてみました。大丈夫、今年も武骨な鋳物製ストーブに働いてもらいます。

「試し焚き煙は天にひつじ雲」。絵本のようなイメージですが、山麓にある家々の煙突からポツと吐き出された煙がひつじ雲となり、伝道所からの煙は頭上のあの一匹でしょうか。地にある私たちと、先に召されて天に憩う兄妹が、こんなふうの一つながりの群であればいいのに。子供の時のように、この頃一日に幾度も天を見上げます。



「あなたがたは、雲が西に出るのを見ると、すぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。また南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。

偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか(ルカ 12 : 54~56)」。



私たちはイエスさまに叱られます。高く神を仰ぎ見、召された姉弟のおもかげを天に探すのではなく、今この地に起こっていること、これからここで起ることに目を注ぎ、ということなのでしょう。終りの日を取っているキリスト者らしく、感覚を柔らかくして耳を澄まし、自分の眼で「今の時」をこの地で見分ける、と。

今の時をこの地で見分けるにはどうすればいいのでしょうか。「天は地の鏡」だとしても、伝道所の煙突が吐き出した一匹の羊は、もう随分南に流れて形を変えてしまっている。頭上では、どこやらからやって来た幾匹かの羊が世を映しています。これらの羊を私たちが真下の地で見分けていく。

「試し焚き煙は天にひつじ雲」。羊に映された「今の時」を見分けながら、今の自分をも見分けたい。羊の背景の青空、秋のど真ん中、雲間の蒼さが鏡として地にある私たちの姿を映し出しています。ひつじ雲に遮られた断片ではありますが。Ω

